

## 7 民俗行事にみる旧村の伝統と新しい街・大和田新田の姿

藤 由美

### 1 はじめに

大和田新田は近世になって村立てされた新田村である。成田街道に沿った立地から、特に近世からは農業以外の様々な生業が盛んで、近隣の村からだけでなく遠方からも人々が流入し、それらの人々が善兵衛組の流れをくむ上区と佐五兵衛組の後の下区の二つの自治組織を構成して、それぞれ発展して現在に至っている。

八千代市郷土歴史研究会では、中世にさかのぼる旧村の上高野と高津、近世からの新田村である高津新田、そして今回の大和田新田の地域総合調査を行ってきているが、それらのムラで現在に至る民俗行事は、基本的に近世後半から近代のムラの生活に定着し、そして戦後急速に廃れていく流れの中にあった。

大和田新田もその例外ではなく、ムラからマチへ、そしてニュータウン化へと変貌のスピードは著しく速く、伝統的な民俗行事とそれを支える講などの組織もその変化の只中にある。マチのコミュニティは、開発のラッシュと流入する住民層との中で、どのように適応し、維持されているのであろうか。民俗行事と伝統的な習俗はどのように変わろうとしているのだろうか。

大和田新田の上区・下区の民俗行事の変遷を、石造物を手がかりに整理し、そして平成18年(2006)から19年(2007)にかけての地元の方々からの聞き取り調査の記録と、祭りなどの参加取材を通じて、明らかにしていきたい。

なお聞き取り調査にこころよく応じていただいた次の方々と、取材に同行くださった石井尚子会員に謝意を表します。

上区：白井富美子様・五十嵐正彦様・中台房子様

下区：澤田文済様・小林恒様・小林佐和子様・鈴木薫明様・鈴木君子様

### 2 大和田新田の年中行事歳時記

現在行われている年中行事と、最近まで続けられていた講については、次の通りである。

#### (1) 下区の祭礼と講

##### ① 神社の祭礼

- ・下区八幡神社元旦祭 1月 1日 (大晦日から奉仕して、参拝者を迎える)
- ・八幡奉射 1月 15日 (当番制で飲食中心)
- ・神明奉射 2月 1日 (当番制で飲食中心)
- ・稲荷奉射 2月初午 (これだけは当番が東側から回ってくる)
- ・天塔奉射 2月 8日
- ・八幡奉射御幣入り 10月 10日

##### ② 講

- ・念仏講 毎月 21日 (高齢化により平成13年解散)

- ・八日講 奇数月 8 日（出羽三山参りをした男の人 八幡神社本殿にて）
- ・庚申講 庚申の夜（7 軒の講員 持ち回りで自宅をヤドに開催）
- ・観音講 毎月 22 日（80 歳代の女性）
- ・秩父講 毎月 20 日と 22 日（秩父参り同行の女性・世代別に 2 グループある）
- ・観和講 毎月 23 日（子安講を卒業した女性、50 歳代が多い）
- ・子安講 毎月 19 日（子育て世代の母親が現在も数名集まる）

③ その他

- ・お盆祭り 8 月第一週の土～日曜日

(2) 上区の祭礼と行事

① 神社の祭礼

- ・上区八幡神社初詣 1 月 1 日（青年会が大晦日から奉仕し、参拝者を迎える）
- ・新木戸まつり 10 月 8 日（青年会主催の神輿渡御とパレード）
- ・八幡神社例大祭 10 月 9 日（「ココノカマチ」、神明社も同日）

② 講（いずれも日にちは当番が調整する）

- ・二十六夜講 正月、5 月、9 月、「六夜さま」
- ・観音講 正月、5 月、9 月
- ・子安講 毎月
- ・大師講 2 月、6 月、10 月（他の講と同月にならないようずらしている）

③ その他

- ・盆踊り 8 月第一金～土曜日（町会が主催）
- ・合同七五三祝 11 月第一土曜日（町会が主催）

### 3 出羽三山信仰について

北総の真言宗の盛んなムラでは、イエを継ぐ惣領（長男）は「一生に一度は奥州参り」をすることが不文律になっていたといわれ、奥州参りを成し遂げた「行人」になってはじめて寄り合いへの仲間入りが許されたという。

出羽三山信仰は、山形県の月山、羽黒山、湯殿山を行場として山伏の修験道を背景とする呪術的信仰で、その極意は即身成仏にあり、山伏修験者は大日如来または不動明王と団体になることを目的としている。

かつては旅立つ前に同行の者が集まり、七日間のお籠りして別火精進の修行を行い、自らの擬死再生を意味する白装束に身を固め、1 ヶ月以上の登拝の「三山駆け」の旅に出て、帰村すると村をあげての祝福をうけ、行屋でさらに三日ほどの後精進を済ませて解散となる厳しい宗教行事であった。

行人の証しとして新行人は「剣梵天」を与えられ持ち帰る。この剣梵天を供養塚に埋納する行事を「梵天納め」といって、擬死再生によって宿した命を再び祖霊の鎮まるお山（梵天塚）に埋葬する葬送儀礼であった。同行した行人同士は、兄弟以上に結ばれた縁と三山巡拝の記念、そして大日如来供養のため、梵天塚に供養塔を建てる「石建て」を行い、行人によって組織される「八日講」などの三山講に入る。（八日講は、空海が

湯殿山を開基した大同元年四月八日に因む湯殿講に由来すると伝承されている。）

また、ムラの平安と五穀豊穡を祈願して、春にテントウネンブツ\*（天道・天塔念仏）などの行事が行われたり、行人の死去に際しては、登拝時の装束を着せ、梵天を立ててカミとしての葬儀を同行者の講で執り行ったりするなど、三山信仰はムラの重要な宗教行事の中心であった。（テントウネンブツ\*については、筆者が『史談八千代』第26号（2001年）で、上高野の事例を紹介した。）

戦後、特に高度経済成長以後は、交通・生活・信仰形態が著しく変化し、かつてのような厳しい「奥州参り」や三山講のムラ行事は様変わりしていると聞く。現在、大和田新田では、どのように三山登拝が行われているのだろうか。上区・下区の梵天塚の三山供養塔の記録をデータに、下区では「八日講」世話人の澤田文済氏、上区では最近の三山登拝で先達を務めた五十嵐正彦氏に、現代の奥州参りの様子をお聞きした。

#### （1）下区の出羽三山講（八日講）

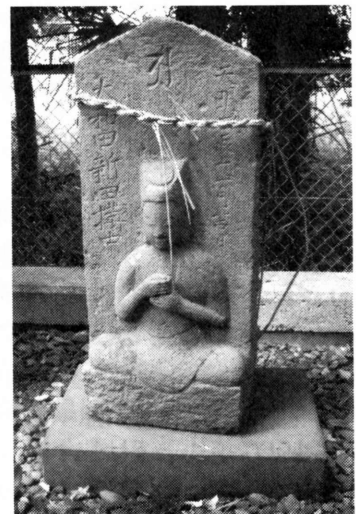
- ① 下区では、都市計画道路開通のため平成7年（1995）に移転後完成した八幡神社境内の西側に新しい梵天塚が築かれ、毎年2月8日ムラの行事であるテントウビシャ（天塔毘社）の際に立てる梵天の後ろに、8基の出羽三山供養碑が並んでいる。



下区八幡神社境内の新しい梵天塚

- ② 下区の梵天塚は、元は一本松にあって、かつては2月8日に梵天を一本松の塚までかついで行ったが、八幡神社完成の際、新しい梵天塚を境内に整備し、8基の出羽三山碑と「天明四年」（1784）銘の大日如来石像を移転した。この大日如来石像も寄進が「大和田新田講中」となっており、元は梵天塚にあったことから、出羽三山信仰に関連する供養塔であった可能性があり、この地区の三山信仰は18世紀末にさかのぼれるだろう。

- ③ 下区の最初の三山碑建立は明治17年（1884）で同行者は7名、右に月山・真ん中に湯殿山・左に羽黒山の神社銘を刻んでいる。以下、明治24（1892）・昭和14（1939）・昭和26（1951）・昭和34（1959）・昭和44（1969）・昭和54（1979）・平成2（1990）年に建立されているが、これらは全て月山神社銘を中央に配している。戦後は、ほぼ10年の間隔で三山登拝が行われているが、平成12年（2000）に行われた登拝では、石塔の建立はしなかったとのことである。



梵天塚にあった大日如来の石仏  
（「天明四年」「大和田新田講中」の銘）

- ④ 碑文から同行者の数がわかる範囲で、推察すると昭和 44 年 (1969) が 32 名と一番多い。また同行者の年齢が刻まれた平成 2 年 (1990) の碑文で見ると、年齢層は先達の 52 歳を最高に 50 歳代 3 名、40 歳代 8 名、30 歳代 4 名、最年少は 22 歳で、40 歳代の働き盛りの男性が中心である。
- ⑤ 現在の三山登拝の日程は、平成 2 年の碑文によると、「7 月 18 日 鳴子温泉、同 19 日 西藏坊、同 20 日 温海温泉、同 21 日 湯田中温泉」の 4 泊 5 日の旅程となっており、御師の宿坊である西藏坊に泊まった翌朝に月山登頂を含む三山詣を行っている。
- ⑥ 聞き取り調査では、大正 10 年 (1921) にお生まれになった澤田文済氏(屋号チョーチンヤ)にお聞きした。澤田氏は、八日講の世話役のお一人で、平成 17 年 (2005) に梵天塚前の灯籠 2 基を個人で寄進されている。

澤田氏が奥州参りに参加したのは、50 年前の昭和 44 年 (1969) のときで列車の旅であった。羽黒山西蔵坊に泊まり、翌朝 3 合目までバスで行き、そこから月山へ。昼に登頂し、湯殿山を巡って、鶴岡温泉に泊、翌日は新潟から佐渡島へ行って泊まり、戸村温泉にもう 1 泊して帰ったという。

- ⑦ 「八日講」は、奥州参りの成就者のみ講員になれる講である。世代交代があれば、若い人が入ってくるが、一つの家で一人だけの参加である。

奇数月の 8 日の午後から八幡神社本殿に集まり、「三山拝詞」を唱えてから、飲食を共にする。食事の用意も全部男だけで行う。

三山登拝の際に着用した行衣は、大事に保管されている。昔は、八日講の人が亡くなるとこの行衣を着せ、梵天を立てて、八日講で葬式を行ったが、今は葬式のやり方が現代化してしまったので、講に関わることはない。

なお、下区の八日講に関しては、『よなもと今昔』13 号に「大和田新田の天塔毘社」として詳細に報告されている。



三山登拝の際に着用した行衣

## (2) 上区の出羽三山講

- ① 上区では、神明社の西側「コウシンヤマ」に出羽三山塔が並べられてある。自然石の大正 5 年 (1916) は最初で、平成 11 年 (1999) まで 9 基がそろっている。建立間隔は数年～二十年ぐらいで、登拝しても石建てしなかった回やすぐに建てなかった回もあるが、現在はおおむね十年ぐらいごとに登拝が催行されている。
- ② 同行者の年齢の刻まれた昭和 32 年 (1957) の参拝記念碑では、23 名の男性が参加し、61 歳 1 名が最高齢で、30 歳代は 3 名、40 歳代 9 名、50 歳代 8 名である。1960 年代までは数年経って 5～6 名で行われた回もあるが、近頃はバスなどの手配や費用から 20 名以上の参加が望ましく、ほぼ十年ごとを目途に参加者を募っている。

平成元年 (1989) の参加は、60 歳以上が 3 名 (内 71 歳が 1 名)、30 歳代は 3

名、40歳代11名、50歳代21名の総勢38名の参加である。平成11年(1999)33名についてもほぼ同傾向で40歳代と50歳代が中心に行われている。

- ③ 最近に行われた平成11年の登拝については、参拝記念碑に53歳で先達を務められたとある五十嵐正彦氏にお聞きした。五十嵐家では、昭和32年(1957)に先代の佐市氏が43歳で、昭和16年(1941)に先々代の豊彦氏が57歳で参加されていることが、参拝記念碑で確認できる。

一生に一回の三山登拝の準備は一年前から企画され、平成11年の登拝では、「新木戸三山会」という会を組織することから始まった。会長(先達)・副会長・会計・世話人の人選を行い、予算を決め、会員を募り、会費の積立てを行う。40歳以上の男子であれば、一緒に登拝を希望するだけでも参加でき、会員に関して旧家とか跡取りとかの資格は以前から一切ない。30歳代は十年後の次の登拝を挙行する世代なので、特別の事情でなければ誘わない。

平成11年の新木戸三山会の登拝では、7月18～21日の2泊3日の予定で、会費は1名八万円、残金があれば記念碑建立に当てることとした。第1日目は、山形新幹線で山形へ、そこからバスで羽黒山に着き、すぐに羽黒山神社を参拝し、宿坊に一泊する。翌朝は月山八合目までバスで上り、2時間かけて月山頂上を登拝、湯殿山へ徒歩で巡拝する。登山の際は「強力(ごうりき)」とよぶガイドが案内してくれる。八合目までバスで上られるので、ハイキングコース並みの登山であるが、以前革靴で参加して苦労した方もいたと聞いているので、登山の基本的な注意点は事前によく説明しておく。湯殿山からはバスで秋保温泉に行き、宴会を行い、翌日は仙台から松島を遊覧して、帰宅の途についた。

旅行社にすべてお任せしてあるが、宿坊だけは宮田坊を指定する。宮田坊からは毎年4月に挨拶に人が来る。また羽黒山神社の初午のお札を送ってもらうなど、永年のお付き合いがある。



平成11年の新木戸三山会の登拝記念写真

その年(平成11年)の秋11月に石建てを行い、ささやかな宴会を開いた。その後、お礼参りとして2年後の平成13年(2001)、伊勢神宮参拝旅行を行った。

- ④ 下区の八日講のように登拝経験者が講を日常的に開くことは、現在上区ではないが、登拝旅行の度ごとに、例えば平成11年の新木戸三山会のように独自の名前をつけた会が結成され、その会が懇親行事を行うことは多い。「三山拝詞」を唱えるなどの宗教的な神事は、今はもう行っていない。ちなみに平成元年に登拝した会は、「平成元年会」という。

昨年(平成18年)、各三山会全員の集まりが、珍しく持たれ、有志で八幡神社の清掃奉仕を毎日曜日の朝行うことになった。各三山会は「講」という伝統的宗教的な形ではないが、町会行事などを担う壮年層の同じ世代間のコミュニケーション

の場でもあり、新しい地域活動の活力の源となっている。

#### 4 女人信仰と講、石造物について

ムラの女人信仰とそれに関わる石造物については、筆者が『史談八千代』第30号（平成17年）に、高津の事例を元にその考察を報告した。高津と大和田新田は隣り合わせのムラであるが、村の生い立ちとともに両村でどのように異なるものなのか、あるいは同質なのだろうか。大和田新田の女人講について、石造物の調査データを基本に、聞き取り取材による現在の状況を記しておきたい。

##### (1) 下区の女人講

- ① 下区では、庚塚に女人講の供養塔が集められている。安永10年(1781)の十九夜塔(如意輪観音像)が初出(「十九夜講中廿四人」)。明治22年(1889)の子安観音像の浮彫りに「十九夜」の刻字と台座に「女人講」。大正4年(1915)からは子安塔に変わり、昭和34年(1959)まで計9基。そのほか、下区公会堂には、昭和59年(1977)の百観音参拝と、平成9年(1997)の秩父参拝の巡拝供養塔が建立されている。



下区庚塚の女人講の石塔群

- ② 聞き取り調査では、女の人の講は、子安講が世代別に5つもあるとのこと。

現在の最高齢世代の講は「観音講」で80歳代。その下は一緒に秩父参りをした縁に結ばれた70歳代と60歳代の2つの「秩父講」で、10名ぐらいて一番元気がよい。公会堂に集まり、秩父巡礼の朱印を押した掛け軸をかけるほか宗教的なことはなく、プライベートな懇親に徹している。

その下の50歳代は、かつての子安講を卒業した仲間と結ばれている「観和講」で、この講の名前は鈴木君子さんが名づけた。今は14名ぐらいが公会堂に毎月23日に集まるが、二十三夜講の謂れとは無縁で、公会堂が空いている日だったからとのこと。四国八十八ヶ所巡りや秩父・坂東巡りなどをしていたが、今は観光旅行が主で、もっぱら親睦をあたためている。

その下の子供養育中の世代の子安講は、昔は人数が多かったが、今でも数名で続けている。



下区の観音講の掛け軸

##### (2) 上区の女人講

- ① 上区の女人講関連の石塔は、合計で14基ある。子安塔(子安観音の像容の石塔)は、八幡神社境内に天保3年(1832)(「子安講中」)から昭和44年(1969)(「女人講中」)まで6基、十九夜塔(如意輪観音像に「十九夜」)は、神明社境内に天保10年(1839)

と、明治4年(1871)の2基が残っている。

そのほか特質すべきは、二十六夜塔(文字碑)群で、神明社境内に並ぶ明治14年(1881)から大正・昭和時代の4基、そして最新は平成13年(2001)の造立(白井秋子他34名)の5基がそろっている。また下区太郎兵衛野の庚申塚に安政2年(1855)銘の二十六夜塔(文字碑)があり、19名の寄進者が屋号で記載されているが、そのうち、善兵衛など10軒の屋号は上区の旧家で、4軒が下区の屋号である。

また、新木戸前の成田街道沿いに近隣の「運総連」が大正2年に建てた「無縁法界供養塔」があり、吉橋貞福寺からいただいた施主名「新木戸二十六夜講」の卒塔婆が、毎年春の彼岸に供えられている。この地点(送電塔の向かい側)は成田街道の分水界となる地点で、かつては高さ2mの塚があり、無縁法界供養塔もこの上に奉られたという。

- ② 聞き取り調査(白井家・中台家)では、女性の講は3つの世代別に構成され、お嫁さんから子供が7歳ぐらいまでは子安講、45歳ぐらいから上は二十六夜講、さらに上は観音講に入る。

二十六夜講は、愛染明王を主尊とする月待講で、十九夜講・子安講に比べて少なく、石造物調査表でも、個人の建塔は別にすると、八千代市内では稀少で、又現在に続く講としても唯一の講の可能性がある。(7まとめと考察を参照)

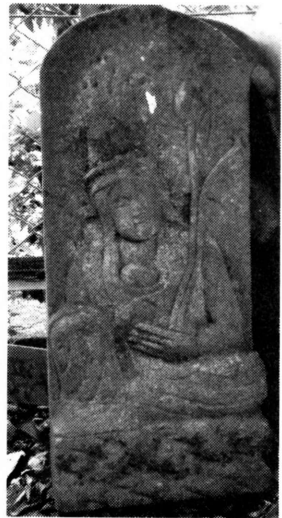
現在の二十六夜講は、「六夜さま」と称して、3人ずつの当番が、お寿司屋を予約し、正月・五・九月に講を開く。日取りは、当番が調整し決める。儀礼は掛け軸を掛け、テープのお経(?)を流すのみ。昔は公会堂がいっぱいになったが、今(平成18年)は20名ぐらいの参加である。講に入るときと抜けるときはお菓子を配る風習がある。

もっと高齢な女性は、観音講に入り、正・五・九月に講を開く。人数は少ない。念仏はもともと新木戸の男性中心で、女性は和讃を覚えたという。

子安講には、昔は子供を負ぶって参加し、当番は混ぜ飯を炊き、皆はおそうざいを持ち寄った。35年前は、市川真間の手古奈様にお参りしたこともあった。今も毎月開かれているとのこと。

## 5 その他の講

### (1) 下区の念仏講

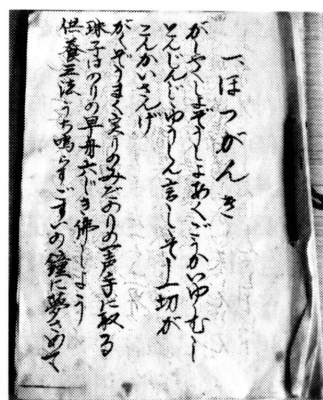


上区八幡神社境内の子安塔  
(「天保三年」銘ほか)



上区明神社境内の二十六夜塔群  
(「明治十四年」銘ほか)

最年長の男性の「念仏講」は、毎月 21 日に開かれていた。高齢化により平成 13 年（2001）に解散、公会堂にはその年（2001）の 9 月に、念仏講解散の記念碑が建立された。澤田文済氏が最後の親方で、念仏の帳面 \* が手元に残されている。（\* 資料 2）



澤田文済氏の念仏帳

## （2）下区の庚申講

庚申講は、今も 7 軒でヤドを持ち回りで行っている。7 軒はジンベイ家・ジンベイ新宅のキンニム家・チョーチンヤ・トバヤ・ソゴゼム家・ホンゴウ家・コマツヤで、前の当番が「オカケジ」（掛け軸）を持ってくるが、今はもう拝むことは略されている。

庚申の日は 60 日目なので、ほぼ 1 カ月おきに当番の家をヤドにして開かれ、会費は 100 円を負担する。昔は、お米を集めてご飯を炊き、また徹夜だったが、今は女の人がいへんなので、手間はかけずに夜 8 時ごろから 11 時ごろまで酒宴を開く。

## （3）上区の富士講

上区神明社には、幕末の嘉永 3 年（1850）と慶應 3 年（1867）の富士講の巡拝塔 2 基が残されているが、今も富士講が続けられている。

現在の講社は、船橋市宮本町下宿の茂呂神社にある「やま玉・まる下講社」の新木戸支部に所属する。この講社の名前は、トレードマークが山の絵の下に「玉」、丸の中に下宿の「下」であることに由来する。

五十嵐正彦氏など世話人が地域の人に呼びかけて、隔年おきに富士登山が催行される。最近では平成 18 年（2006）に行われたが、今は、ほとんどこの登山ツアーを行うことが目的で、日常の行事は、宮本町下宿公会堂で行われるこの講社の正月 3 日の「初拝み」と 7 月 1 日の「山開き」に役員が行く程度である。

富士登山はここ数年、7 月 21 ～ 23 日に 2 泊 3 日で行われ、バスで富士山五合目まで上り、ここで登頂を目指す登山組と、登山はせずバスで景観地を巡る「中道（ちゅうどう）組」に分かれる。登山組は八合目の山小屋「蓬莱館」に宿泊し、翌日午後に二つの組が合流して温泉に一泊し、帰路に着く。

蓬莱館に泊まることは昔から決まっていて、また昔からお世話になっている富士吉田の御師の「菊や坊」にも毎回寄って、白装束の行衣に登山の朱印を押してもらう。神聖な行衣以外に朱印を押すことは今までなかったが、昨年、講社のマークの入った T シャツを作ったところ、このデザインなら御師さんが、捺印を許可してくれたとのこと。



富士講で新しく作ったオリジナル T シャツのデザイン

#### (4) 上区の大師講

上区の八幡神社の裏にある吉橋大師講第 67 番札所のお大師様の供養にちなむ講。巡礼は行っていない。二十六夜講と観音講の講員が多いので、重ならないように 2 月・6 月・10 月に新鰯隣の第二公会堂で飲食をともにしている。

### 6 青年会中心の新しい祭り

大和田新田、特に上区は、旧来からのムラヅキアイとムラの行事を、新しい街の発展にあわせて変容させ、新旧住民の新しい共生の場を作っている。

特に上区・下区とも青年会は会員が多く、その活動も盛んである。また両地区の青年会のその主要なメンバーが、八千代市消防団第 3 分団にともに所属し、ともに活動していることから情報交換も盛んで、お互いの活動をフォローしたり学んだりして、地域に貢献している。その姿を紹介したい。

#### (1) 上区の「新木戸まつり」

上区の青年会主催の「新木戸まつり」は、戦前までの八幡神社の 10 月 9 日例大祭「ココノカマチ」の「餅をついて、甘酒を飲んで、神主が来る」だけのささやかな祭りの翌日に、青年会が神輿の渡御するにぎやかな祭りを加えたのが始まりで、10 月 10 日の体育の日が祝日として定着した高度経済成長以降の新しい祭りである。(昨今は「ハッピーマンデー制度」の適用で、10 月 9 日の本祭と離れない週末に行われる。)

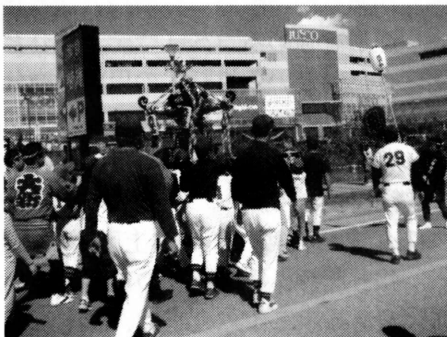
新木戸保育園の園児たちによる鼓笛演奏のパレード、地元少年野球のリトルリーグチームの参加もあり、また神輿入れ後、神社の境内では子供相撲や幼児向けのゲームなど、子供と若い子育て世代、マンション住民の参加に努力している。

#### (2) 上・下区の両八幡神社元旦祭(初詣)と盆踊り(お盆まつり)

12 月 31 日の大晦日、夜がふけると上・下 区の両八幡神社とも、テントが張られ、照明が煌々と点き、午前 0 時の初詣を目指す参拝客の行列が長く伸び、境内では餅つきや甘酒をふるまう準備が進められていく。この徹夜の行事を支えるのは、それぞれの神社の氏子世話人と青年会である。下区の青年会は、堀に沿って長時間並ぶ参拝客に地域の歴史を知ってもらおうと、様々な展示を試みている。(平成 18 年は、「史談八千代」第 31 号からの抜粋を展示された。)



上区の「新木戸まつり」  
園児も一緒にパレード



神輿はリトルリーグのメンバーにリレーされる

また、夏の行事として、上区では「お盆まつり」を8月第一週の土～日に、下区では町会主催での「盆踊り」を8月第一週の金～土に行うようになった。いずれもマンションなどの新しい住民の参加を呼びかけており、また青年会のメンバーがこれらの行事を担っている。

## 7 まとめと考察

- (1) 江戸時代の新田ムラである大和田新田の基本的な民俗行事、特に様々な講が、男女別・世代別に組織され現代に続いている姿は、高津や吉橋など中世からの古いムラと共通する点が多い。宗教的な習俗である講が、世俗化されてムラの生活に定着していく時期が、江戸時代の新田開発以降、特に生活にゆとりが生じ、巡拝などが自由になくなった江戸後期に盛んになるゆえであろう。

しかしながら、新しい新田ムラであり、流入してくる世帯が近世からも多く、イエの格式や序列に縛られない大和田新田の気風は、時代の変化に臨機応変に適応していく機敏さなどにおいて、他の旧村から際立っているように感じられる。

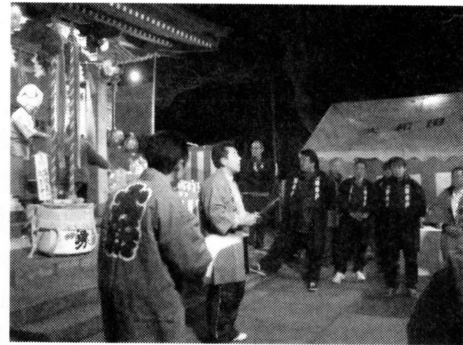
上区の現在の三山登拝は、男なら誰でも参加できるハイキングと名跡めぐりと宴会の楽しいツアーで、昔の記録で見る「三山駈け」の厳しい修験道の世界とは隔世の感があるが、町おこしの核となる壮年世代の連帯を強めるコミュニティのひとつとして、おじいさんの頃からの伝統は続けていきたいという世話人の思いは充分かなえられていると思う。

両区の青年会が、神社祭りや初詣などのイベントに積極的に関わり、ユニークなアイディアで、新しい町の住民と共通のコミュニティを作ろうと模索している姿も注目される。

- (2) また大和田新田の上区が成田街道の入口である立地は、江戸時代から様々な情報と流行、人の流入の玄関であった。上区の二十六夜講は女人講として珍しい習俗である。二十六夜講は、二十三夜待のように全国的な行事ではなく、やや偏った分布を示す。その原因として関東地方では、「江戸の六夜待」として近世の江戸で隆盛をきわめた一時期があったからという。月齢二十六前後の月は三日月のように細く、東天に姿をみせるのは明け方に近い時間である。この際、弥陀三尊が見えると言って、文化・文政の時代には湯島天神などの高台や芝高輪などの海岸が見物客でにぎわい、月待信仰の名を借りた夜遊びの遊興娯楽の行事であったことから風俗の乱れを懸念する幕府の取り締まりが行われ、天保期に入って急速に廃れたらしい。



下区八幡神社の大晦日深夜の元旦祭り



上区八幡神社の初詣  
新年に向けてのカウントダウン

上区の二十六夜講についてそのいわれは伝わっていないが、江戸の流行はいち早く吸収する成田街道筋のムラという要素は否定できないと思う。

- (3) 以前調査した高津新田も同じく江戸時代の新田ムラであるが、出羽三山講が行われていないなどその民俗は異なっている。高津新田では村だての際、その草分けに日蓮宗の長胤寺を檀那寺とする家が多かったことに對し、大和田新田では、上区では吉橋貞福寺、下区では正覚院や大和田の円光院など真言宗系の檀家が多いことなど、仏教の宗派の違いが一因であると考ええる。

#### 資料1 八日講の「三山拝詞」

- 一、モロモロノツミケガレハライ ミソギテスガスガシ
- 二、トホツカミエミタマエイヅノ ミタマヲサキハエタマヘ
- 三、アマツヒツギノサカエマサンコトアメツチノムダトコシエナルベシ

- 一、アヤニアヤニクスシクタフト 月ノミヤマノカミノミマエヲ  
オロガミマツル、くり返し三回
- 一、アヤニアヤニクスシクタフト 羽黒ノミヤマノ神ノミマエヲ  
オロガミマツル、くり返し三回
- 一、アヤニアヤニクスシクタフト 湯殿ノミヤマノ神ノミマエヲ  
オロガミマツル、くり返し三回
- 一、アヤニアヤニクスシクタフト ゴダイソンノカミノミマエヲ  
オロガミマツル、くり返し三回
- 一、アヤニアヤニクスシクタフト 四十八村ノ神ノミマエヲ  
オロガミマツル、くり返し三回

資料2 念仏講の帳面（全部で21ページにわたるが、1~6ページまでの「一、ほつがんき」を原文のまま採録し、「二、十三佛」以降は省略した）

#### 一、ほつがんき

がしやくしよぞうしよあくごうかいゆむし  
とんじんじゆうしん言しゝそー一切が こんかいさんげ  
がくぞうまく実りのみだのりの一声手に取る

珠子はのりの早舟六じき佛しよう

供養三法うち鳴らすごすいの鐘に夢さめて

あうんの二字をいるぞうれしき

めいこう三界じようごく十万苦ほんらい

むとうざいがしよう南北南無弥陀佛せいー

せいとうとうがんすじようだつく三界とつけん

菩提諸行無情是しよう滅法生めつめつ

いじやくめついらく供養三法

二回「一心頂来萬徳円満しやか如来しんじん

しやありほんじほーしんほーかいとーばー  
がーとーらいきよいーがー心にゆーががーにゆ  
佛界ちごがしよぼーだーあいん佛人力  
りしやくしゅうじよほつぼだいしん衆ぼー  
さつぎよどうにゆいんじやく平等大師  
こーをんちようーちをよらい

一〇「南無しやかふーげん文殊の修羅せつゝの  
三十番じん」

二〇「南無大師遍生金剛」

三〇南無天台ちいしや大師

四〇南無ぢいがくぢーいん大師

五〇南無十を十三佛の南無はんやの十六ぜんじの

六〇無妙法蓮華経一え

がんだいはつしきようらい天にだいがくそんおーじや  
ふくじかいいんまんいんねんがまんじようしよう  
があく成就除念もこーらいこが長来にみだそん  
がんでいしんとうりんみようしゅうじよ  
しんぷうてんとうしんぷうしやくらん  
しんぷうしつねん しんじんむうしよ  
くうつうしんじん けいらくによーにゆ  
ぜんじよじよーをしげんぜん成佛法願  
成ぼん往生阿弥陀ぶつこくとうひ  
こくいとくろくぜんつーにゆじゅう方界  
そうしようくうしゆじよーをいこーをくー  
ほー界じいがーん りやくによをぜいー  
エッほつがんエゝいゝしき きいみよー  
あーゝゝゝ阿弥陀ー

ジャンひやらひやら

#### 土かけ念仏

往生極樂南無阿弥陀佛

あいじよーどー往生をおがくう

そくしんじよーをゝ佛うー

おや南無阿弥陀

#### 参考文献

- ・『千葉県の歴史 別編 民俗 I (総論)』平成 11 年 千葉県史料研究財団
- ・『日待・月待・庚申待』1991 年 飯田道夫 人文書院